

筆端に載せられてゐないのは残念である。尙又、この書の主題である江南と我國とのかくまででの親近が我々の文化の上にとどのやうなものを齎してゐるかといふことも又一層知り度く思ふところである。これらの傳奇中の貿易家達が扇子や太刀や硫黄など、交換してレケヤの海を積み歸つて來たものは決して銅錢絹布の類のみではなかつた筈だからである。勿論これらの問題ははじめから本書の意圖するところではなかつたであらう。否、恐らくは著者が抱懷して居られるであらう更に雄大な構想の下に描かるべき日

支交通の諸問題の基礎的な研究として、又これに關する新たな視角への示唆として私は本書を高く評價したい。殊にその意味で元和航海記の研究の如き再讀三讀すべき貴重なる文字と思はざるを得ない。いふまでもなく我國土の理解は日支交通の歴史地理的な研究徹くしては成立し得ないものであらう。本書の前篇ともいふべき古代篇の刊行を鶴首すると共に、更にそれに續くべき著者の次作が炬火のやうに我々を照らす日を待望してやまない所以である。(菊版四二三頁、圖版二葉、東京富山房發行、定價參圓參拾錢)(室賀信夫)

漢六朝の服飾

原田淑人著

著者が既に大正十年『支那唐代の服飾』なる研究を發表され、以て絢爛たる唐代の服飾を復原し得られたことは學界衆知のことである。その際著者は同書に於いて『支那服飾の研究は先此時代(唐

代)を闡明し然る後にその源泉に遡り又その流委に及ぼさざる可からず』と述べられて、將來の研究の繼續をほのめかされてゐた。そして爾來十數年を経てこゝに『漢六朝の服飾』を公にされ、唐以前の支那服飾を明らかにし併せて前の『支那唐代の服飾』の訂誤を企てられたのである。

さて服飾に關しては書經益稷篇の十二章の冕飾をはじめとして古典記載のものは、三代の古制を傳へてゐると云はれるがもとより明かでなく、而も當時の遺物としては僅かに殷墟出土の貝製・骨製の服飾品を見るにすぎない。然るに漢代殊に後漢時代には冕服十二章をはじめ諸般の服制がとゞつて實際的に行はれるやうになり、その後多少の變改あつたがその服制の大綱は大體踏襲されるに至つた。そして漢代には關係の文獻も相當な分量に上り且最近考古學の發展は當時の遺物資料を提供して、以て當時の服飾の具現化が或る程度可能である。とは云へ文獻による時服飾の立體的復原は充分でなく、是に於いて著者はよく文獻による縱横なる考察を主とされ乍らも、同時に考古學的遺物に對する多年の經驗により、その困難に克たれて現實的に支那服飾が磨立して後の隋唐以後の支那服制に基礎を置いた漢六朝時代の狀態を髣髴せしめられてゐる。以下本書の梗概を述べて見よう。

第一章は絹布で先づ養蠶の中心地・機織の方法が述べられ、更に絹布の種類(錦・綾・綺・羅・縠・紗・平絹・刺繡・麻布・組)と産地が取扱はれてゐる。次いで問題の圖紋が取上げられ書經益稷篇の十二章に關する二説(孔安國・馬融の説と鄭玄の説)を批判

して、著者は漢代の十二章を續漢書輿服志に見るが如き日・月・星辰・山・龍・華蟲・藻・火・粉・米・黼・黻であつたことを確信されてゐる。そしてその具體的形象が一々與へられ、元來日月星辰は天子の標識であり、山龍華蟲は繪畫的圖象であり、藻火粉米黼黻は刺繡的圖象であることが述べられてゐる。最後に新彊省樓蘭と外蒙古ノイン・ウラ出土の遺品の圖紋が神仙思想を反映したものであることが述べられてゐる。

第二章は祭服で漢代には冕冠・長冠・委貌冠・皮弁冠・爵弁・建華冠・方山冠・巧士冠の八種があつたがその形態が一々その細部まで考察されてゐる。六朝には漢制が大體踏襲されたが後周にいたり従來の單一性が破られ諸種の區別が生ずるにいたつた。尙女子の祭服も併せ述べられてゐる。

第三章は服制であるが漢代には通天冠・遠遊冠・高山冠・進賢冠・法冠・武冠・卻非冠・却敵冠・樊噲冠・荀氏冠の十種があり六朝にいたつてもその大體は踏襲された。六朝にいたり前代に比して特異なものは袴褶の制で、これは胡服の影響であつて北朝の人は殊に愛用したものであつた。

第四章は服飾雜として頭髮・巾幘及帽・帶・綬・鞞・笏・佩刀・釧・履及靴が取扱はれてゐる。以上内容の梗概を略述したが本書は實に著者の周到綿密なる詮索考證の一大成果である。著者が文獻を自由に涉獵驅使せるは勿論であるが、更に漢代の資料としてはノイン・ウラ、樓蘭或ひは樂浪の古墳出土品をはじめとして畫象石・畫象磚が、六朝のものとしては傳顧愷之筆女史箴圖卷や雲崗・

龍門或ひは天龍山・響堂山の石窟の人物畫象やその他明器等の遺物が取扱はれてゐることは吾々の興味を惹く所である。人或ひは著者の遺物取扱ひの方法に對してあきたらずとするかも知れない。然し著者のかゝる態度も亦是認されて一つの高峯を示して居り、そのことは本書が又直接最近出土の服飾關係の遺物の闡明理解に大いなる寄與をなすことと併せて推賞すべき事と思ふ。(四六倍版、東洋文庫刊行、定價七圓)(澄田正一)

古代北方系文物の研究

梅原末治著

古代北方系文物、所謂スキタイ文物に關する探査研究が、東西文化交渉史上の一課題として過去一世紀以來、内・外東洋學者並に考古學者の間に、異常の關心を高めつつあることは周知の事實であらう。

本書はこの方面に對し多年撻まざる努力を以て攷究を續けてゐられる著者が、嘗て滯歐中親炙し、直接指導をうけられたケンブリッジ大學の碩學ミンス教授の華甲頌壽の意を含め、大體昭和三年以降最近に至るまでの間諸種の學術雜誌或は記念論文集等に公表紹介せられた北方系文化に關する論考を一應集成すべく、全面的に新資料の増補、見解の修正を加へて出刊されたもので、次の諸論著(八篇)と外に外國論文の好適なもの四篇の譯出が附載されてゐる。

第一、北蒙古發見の漢代の漆器